

H27地域協働研究（地域提案型・前期）

RN-18「芸術活動を通した障がい者の生きがいづくりー障がい者の社会参加を促進する公募展のあり方についてー」

課題提案者：いわて・きららアート協会
研究代表者：社会福祉学部 佐藤匡仁
研究チーム員：村井資（いわて・きららアート協会）

＜要　旨＞

本研究の目的は、岩手県内全ての福祉事業所及び特別支援学校を対象に、障がい児・者の芸術活動支援に関する意識調査を実施することを通して、支援の阻害要因と促進要因を抽出し、得られた知見を研究チーム員の携わるいわて・きららアート協会公募展企画等の運営計画に改善点として盛り込み、芸術活動支援の理解と促進に結びつけることである。具体的には、現在250～300点を推移する公募展の申込数が350～400点となることと、それに伴う質的な向上を図ることとした。

1 研究の概要（背景・目的等）

本研究は、いわて・きららアート協会事務局、村井資氏からの提案により、障がい者の芸術活動支援について、福祉事業所及び特別支援学校を対象とした意識調査を行い、得られた知見を公募展企画等の運営計画に改善点として反映させること、また、芸術活動支援の理解と促進に結びつけ、岩手県の障がい者芸術支援を一層盛んにする手立てを検討することを目的としている。

いわて・きららアート協会は「福祉のフィルターからアートの視点へ」との願いを込めて、当時の福祉施設職員・養護学校教員・障がい者の家族らが中心になり1997年に設立された協会である。以後、障がい者の芸術文化活動を通して豊かに生きていくことのできる社会の実現に向けて、①公募展「いわて・きららアート・コレクション」、②入賞作品巡回展、③アートサポーター研修、④特別展「きららアート十年展」「きららアート・スペシャル・セレクション」、⑤岩手県立美術館との連携等の取り組みを行なってきた。例えば、①の「いわて・きららアート・コレクション」は、年1回開催される公募展で、2015年2月に第18回目が開催された。近年は250点以上の出展申し込みがある。20点の入賞作を選出し、そのうち何人かは県外・海外の企画展に出展要請が来るなど、大きく活躍するきっかけの場ともなっている。第2回以降会場は盛岡市民文化ホール展示ホールで開催され、1週間足らずの会期で県内外から1000人を超える来場者がある（Figure1）。



これら「いわて・きららアート・コレクション」（Figure1）の様子をはじめ、岩手県における障がい者の芸術活動支援の取り組みは、民間の任意団体が会員や協賛を募りながら、公募展を中心とした各種事業を継続・展開し、質の高い作品を多数輩出してきた点で全国的に例が少ない（Figure2）。東北地方は関西圏などに比べ、障がい者芸術に対する理解が

高いとは言えない中、岩手県での取り組みは群を抜いて高く評価されてきた。しかしながら、近年は、公募展への申し込み数は一定数を維持しているものの、新規入賞者は漸減傾向（質的にも十分とは言い難い水準）にある。もともと福祉事業所では、「美術＝生産的でない遊び」との認識がなされる場合もあり、担当職員の意欲や力量によって作品の動向に影響を受けやすい課題が指摘されている。また、支援費制度、障害者自立支援法、障害者総合支援法等をはじめとする近年の法改正の変遷もあり、余暇活動支援における美術などの優先順位は低く置かれることが多い現状もある。したがって、本研究では、障がい児・者の芸術活動支援に関する意識調査を実施し、支援の阻害要因と促進要因について抽出し、得られた知見を今後の岩手県における芸術活動支援の理解と促進、芸術活動を通した障がい者の生きがいづくりに役立てたい。

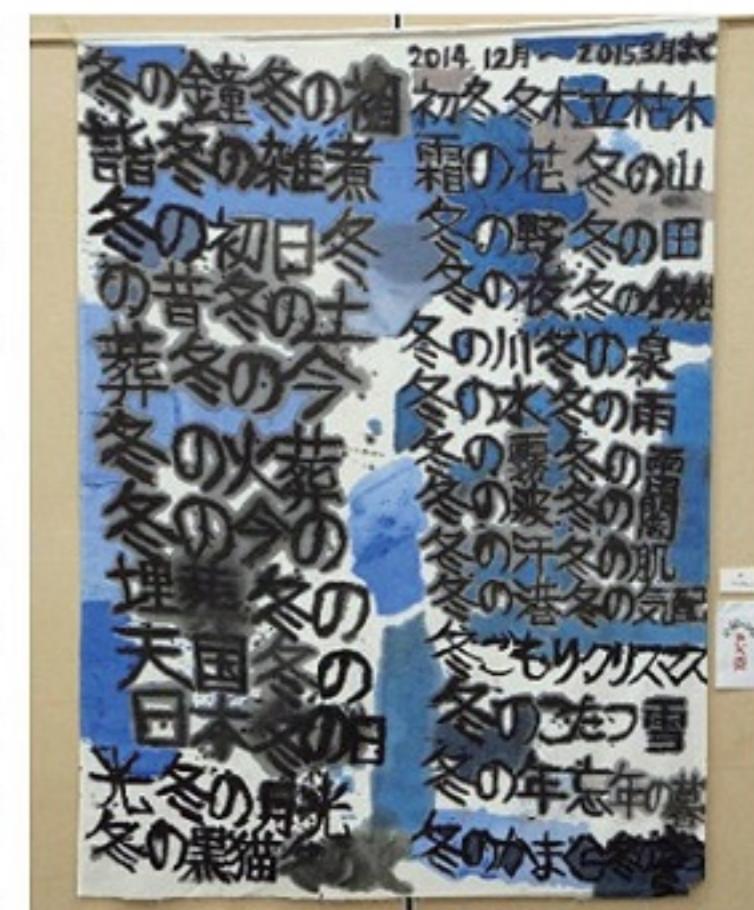


Figure2 第19回大賞作品

2 研究の内容（方法・経過等）

①岩手県内の福祉事業所及び特別支援学校を対象とする質問紙による悉皆調査

岩手県内全ての福祉事業所（292箇所）及び特別支援学校（16校）、計308箇所を対象に質問紙調査を実施した。調査結果から、障がい者の芸術活動支援についての理解・認識や課題について抽出するとともに、改善に必要な方法について分析・検討を行った。

②特色ある福祉事業所及び特別支援学校を対象とするヒアリング調査

近年の取り組みが顕著な福祉事業所や特別支援学校、あるいは関心が示されない福祉事業所や特別支援学校等、公募展に対するアプローチで特色のある事業所・学校等を対象にヒアリング調査を実施し、質問紙で掬いきれないニーズについて分析・検討を行った。

3 これまで得られた研究の成果

質問紙調査の結果、回収数137（回収率44.48%）であった。回答者の性別は、男性53人（39.55%）、女性81人（60.45%）、年齢は40代：57人（42.54%）、50代：31人（23.13%）、30代：29人（21.64%）、60代：8人（5.97%）、20代：8人（5.97%）、70代：1人（0.75%）であった。

①事業所・学校での取り組み状況（質問紙調査から）

何らかの芸術に関する活動を行っているか尋ねたところ、「はい」が87箇所（64.44%）、「いいえ」が48箇所（35.56%）であった（Table1）。

「はい」と答えた87箇所のうち、取り組んでいる芸術に関する活動を複数回答可として尋ねたところ、絵70箇所（80.46%）、歌45箇所（51.72%）、書道39箇所（44.83%）、楽器26箇所（29.89%）、ダンス26箇所（29.89%）、刺繡24箇所（27.59%）、木工19箇所（21.84%）、写真17箇所（19.54%）、陶芸12箇所（13.79%）、俳句5箇所（5.75%）、作詞2箇所（2.30%）、その他24箇所（27.59%）であった（Table2）。

「いいえ」と答えた48箇所のうち、芸術活動支援に取り組まない理由を複数回答可とし

て尋ねたところ、「生産活動が優先されるので、芸術活動にまで取り組む余裕がない」32箇所（66.67%）、「いずれやってみたいと思っているが取り組めずにいる」11箇所（22.92%）、「利用者・児童生徒に関心が見られないで、特に取り組んでいない」10箇所（20.83%）、「事業所や学校と関係のないサークル等で行っていることなので、取り組む必要がない」2箇所（4.17%）、「芸術活動は利用者が生きていくうえで、必ずしも必要ではないので取り組んでいない」2箇所（4.17%）、「以前は行っていたが、芸術活動の支援に長けた職員が異動・退職したのでできなくなつた」2箇所（4.17%）、「その他」11箇所（22.92%）であった（Table3）。

「はい」「いいえ」どちらも対象に、今後よりよい芸術活動支援を行っていくため、あるいは新たに芸術活動支援を始めるためには、どのような条件が整えば良いか、複数回答可として尋ねたところ、「研修会で、制作支援によって利用者がどのように変化し、成果を得られたかを学びたい（事例）」45箇所（33.33%）、「地元で展示・発表の機会が

たくさんあればよい」41箇所（30.37%）、「専門家が事業所に来て、支援の仕方を教えてほしい」35箇所（25.93%）、「研修会で、画材の選び方・額装の仕方など技術的なことを学び、支援に活かしたい」28箇所（20.74%）、「作品制作の機会や場所を提供してほしい」25箇所（18.52%）、「制作支援についてのマニュアルやガイドブックがほしい」24箇所（17.78%）、「制作支援等について相談できる窓口がほしい」23箇所（17.04%）、「研修会で、商品製作・販路開拓など収益を上げる方法を学びたい」20箇所（14.82%）、「東京などの都会や海外で展示・発表の機会がたくさんあればよい」3箇所（2.22%）、「その他」9箇所（6.67%）であった（Table4）。

Table4 芸術活動支援を始めるために必要な条件

条件	箇所	%
画材の選び方や額装の仕方など技術的なこと	28	20.74
制作支援による利用者の変化・成果を知る	45	33.33
商品製作・販路開拓など収益を上げる方法	20	14.82
地元での展示・発表機会の増加	41	30.37
都会や海外での展示・発表機会の増加	3	2.22
専門家の訪問による支援方法の教示	35	25.93
作品制作の機会や場所の提供	25	18.52
制作支援の相談窓口	23	17.04
制作支援のマニュアルやガイド	24	17.78
その他	9	6.67
複数回答可	n=135	

②特色ある事業所・学校の取り組み（ヒアリング調査から）

質問紙調査の付加項目としてヒアリング調査協力者を募った。申し出を得られた事業所・学校が予想以上に多数であったため、調査の趣旨から、はじめて入賞者をだした事業所・学校、はじめて出展のあった事業所・学校、芸術活動に取り組むが、出展のない事業所・学校等を抽出し、ヒアリング調査を実施した。

Figure3は、はじめて入賞者のあった社会福祉法人愛護会障がい者支援施設静山園の利用者の入賞作品である。静山園では、制作者本人の表現自体を最大限尊重し、支援者はむしろ“魅せかた”的工夫を援助していることが述べられた。また、芸術分野の専門性を有した若手職員に、経験年数の長い中核的な職員が出展を勧めたことをきっかけにしたことが語られた。



Figure3 静山園の利用者の入賞作品

4 今後の具体的な展開

自由記述回答を含めてあげられた一つ一つの要望等に対し、協会側が準備・提供可能かどうかを照応させて、公募展企画等の運営計画を検討していく。

5 その他（参考文献・謝辞等）

調査にご協力いただきました岩手県内の福祉事業所・特別支援学校の皆さんに、記して心より感謝の意を表します。